

令和8年3月19日

報道機関各位

熊本大学

【記者発表のご案内】

八代が国際貿易都市だったことを示す 新史料4点を発見

(ポイント)

- 江戸時代のはじめ、カンボジアなどの東南アジアに渡り、貿易を行っていた八代商人の存在を示す一次史料がはじめて発見されました。
- この発見により、八代が戦国期の相良時代(相良氏が八代を支配していた時代)後も国際貿易都市であり続けたことが明らかになりました。
- このたび発見された新史料の内3点を八代市立博物館未来の森ミュージアムの再開館企画展にて特別公開します。

【記者発表について】

本研究成果について、詳細を説明する機会を下記のとおり設けます。参加をご希望の場合は、準備の都合上、別紙「連絡票」により、4月8日(水)17:00までに、熊本大学総務部総務課広報戦略室までご連絡願います。

・日時：令和8年4月13日(月)11:00~12:00(予定)

・場所：熊本大学本部棟1階大会議室(熊本市中央区黒髪2-39-1)

※対面・オンラインのハイブリット形式で実施いたします。オンラインでの参加を希望される方には4月10日(金)17:00までに、連絡票記載のメールアドレスに、参加URLを共有させていただきます。

(概要説明)

このたび永青文庫研究センターと八代市立博物館未来の森ミュージアムが共同で行った熊本大学所蔵松井家文書調査により、八代が国際貿易都市だったことを示す史料が4点発見されました。

八代は中世より続く港町で、相良氏支配下の戦国時代(16世紀半ば)には、徳淵の津^{※1}から中国に貿易船を派遣していた八代商人がいたことが既存の史料「八代日記」^{※2}により確認されています。つまり、この時点で八代は国際貿易都市であったわけですが、その後の八代の国際的貿易活動を示す史料は確認できず、相良時代後の港町八代の実像は謎に包まれ

たままでした。

今回の発見された史料は、八代が相良時代後も国際貿易都市であり続けたことを示すもので、その概要は下記の通りです。

(1)浅山太兵衛覚書(あさやま たへえ おぼえがき)

カンボジアで活動していた八代商人の存在を示す史料

差出人：浅山太兵衛(八代町奉行) 宛名：長岡式部少輔(松井寄之、熊本藩家老)

江戸時代前期(1647or1648年)3月11日付

八代町奉行の浅山太兵衛が熊本藩家老松井寄之に提出した覚書(報告書)。作成年代は記されていませんが、浅山太兵衛の八代町奉行在任期間から、正保4年(1647)もしくは、慶安元年(1648)に作成されたと考えられます。

この覚書は、八代城下町に外国語を話せる者(町人)がいたら報告せよとの藩の命令を受け作成されました。すでに徳川幕府は外国船の来航を制限するなど、「鎖国」政策を進めていましたが、外国船を追い返すためにも、通訳は必要だったと考えられます。この覚書が作成された背景には、海外渡航経験者など外国語を話せる人材を把握しようとする幕府の意図があったものと考えられます。

この覚書には、外国語を話せる町人として、八代徳淵町(八代城下町に所在する町の一つ)の町頭である森与次右衛門のことが記されています。その記述によると、森与次右衛門は、カンボジアに10年ほど居住した経験があり、カンボジアの言葉をよく知っているといえます。また、カンボジアで唐人(中国人)とも交流があったので、唐語(中国語)も少しはわかるといえます。

この記述は、森与次右衛門が八代からカンボジアに渡り、現地の人や中国人を相手に貿易していたことを示しています。桃山時代から江戸時代はじめにかけて(16世紀末~17世紀前半)、カンボジアを含む東南アジアには多くの日本人が渡り貿易を営んでいました。森与次右衛門もそのような貿易商人の一人だったのでしょう。

ところで、森与次右衛門が町頭をつとめる八代の徳淵町^{※3}は、八代城下町に所在する町の一つで、徳淵の津があった所です。相良氏支配下の戦国時代(16世紀半ば)、八代の商人たちが徳淵の津から船を出し、中国へ渡っていたこと、その中の一人に「森」という名字をもつ商人がいたことは、「八代日記」の記述により、すでに確認されています。森与次右衛門は「八代日記」に登場する森氏の子孫だと考えられます。

今回の発見により、「八代日記」に登場する八代商人森家の国際貿易活動がその後も続いていたことが確認されたわけですが、その間、八代の領主は相良、島津、小西、加藤、細川とめまぐるしく交替しました。つまり、八代の領主が誰であろうと、国際貿易商人森家は対応し、活動し続けたのです。

(2)浅山太兵衛覚書(あさやま たへえ おぼえがき)

海外で西洋人と貿易していた八代商人の存在を示す史料

差出人：浅山太兵衛(八代町奉行) 宛名：長岡式部少輔(松井寄之、熊本藩家老)

江戸時代前期(1647or1648年)3月11日付

史料(1)と同様、八代町奉行が熊本藩の家老松井寄之に提出した覚書(報告書)。異国の言葉ができる者がいれば、報告せよとの命令を受け、作成されました。

この覚書には、かつて八代城下町に居住していた弥兵衛(やへえ)が、異国の方々に出かけ、

「南蛮人」(西洋人)と商いをしていたことが記されています。弥兵衛が出かけた異国とは、東南アジアだと考えられます。つまり、この覚書は、東南アジアに渡り、西洋人と貿易していた商人がいたことを示す史料なのです。

なお、この覚書によると、弥兵衛は八代城主の細川忠興^{ほそかわただおき}(1632年から1645年まで八代城主をつとめる)が亡くなると、八代を離れ熊本に移ったといえます。このことは、弥兵衛が忠興に目をかけられた商人であったことを示唆します。忠興は弥兵衛を通して海外の品物を入手していたものと考えられます。

(3) 浅山太兵衛覚書(あさやま たへえ おぼえがき)

輸入品売買のネットワークが八代城下町に形成されていたことを示す史料

差出人：浅山太兵衛(八代町奉行) 宛名：式部少輔(松井寄之、熊本藩家老)

江戸時代前期(1647or1648年)3月11日付

八代町奉行が熊本藩の家老松井寄之に提出した覚書(報告書)で、森与次右衛門の縁者について記されています。森与次右衛門は、史料(1)で述べた通り、八代徳淵町の町頭で、「鎖国」前はカンボジアに10年住んだ経験がありました。

この覚書には、森与次右衛門の親戚として平河原町^{※4}に住む袋屋瀬兵衛と本町^{※5}に住む薬師玄理の名が見えます。袋屋は茶入の袋などを作成・販売する商いで、舶来の布の入手は必要不可欠でした。また、薬師が使用する薬にも外国の植物などが必要不可欠でした。彼らの姻戚関係は輸入品の売買を通して形成されたものでしょう。つまり、この覚書は、八代城下の町人のあいだに、輸入品売買のネットワークが形成されていたことを示す史料なのです。

(4) 浅山太兵衛書状(あさやま たへえ しよじょう)

町のリーダーを集め聞き取り調査を行ったことを示す史料

差出人：浅山太兵衛(八代町奉行) 宛名：式部少輔(松井寄之、熊本藩家老)

江戸時代前期(1647or1648年)3月11日付

史料(1)(2)(3)に添付されていた書状です。本状によると、外国語を話せる者がいたら報告せよとの命令を受けた八代町奉行浅山太兵衛は、町の年寄(町頭)を召し寄せ、聞き取りをしたといえます。その聞き取りをもとに作成されたのが、史料(1)(2)(3)の覚書です。

外国語を知る者として報告された森与次右衛門は、徳淵町の年寄(町頭)なので、彼自身も聞き取りの場に居たと考えられます。史料(1)・(3)は、与次右衛門自身の申告に基づき作成されたものでしょう。

(史料発見の意義)

1 八代が相良時代後も国際貿易都市であり続けたことが確認された

江戸時代のはじめ(17世紀前半)、八代から東南アジアに渡り、現地人や中国人、西洋人と貿易していた商人の存在が明らかになったことで、八代が相良時代後も国際貿易都市であり続けたことが確認されました。

2 八代を拠点に活動し続けた国際貿易商人の存在が明らかになった

相良氏支配下の戦国時代(16世紀半ば)、森という八代商人が中国に貿易船を派遣したことはすでに確認されていましたが、史料(1)の発見により、森家の国際貿易活動がその後も続いていたことがわかりました。

3 八代が東南アジアに向かう貿易船の母港であった可能性が浮上した

今回発見された史料は、東南アジアに渡った八代商人が貿易船のオーナーであったことを直接示すものではありません。ただし、森家がもともと中国に渡る船のオーナーであったこと、その船が徳湊の津を母港としていたことを考えるならば、八代商人の所有する貿易船が徳湊の津から直接、東南アジアに渡った可能性はあるといえるでしょう。つまり、今回の発見により、八代が東南アジアに向かう貿易船の母港であった可能性が浮上したのです。

(発見から発表までの経緯)

熊本大学が所蔵する「松井家文書」は、熊本藩主細川家の筆頭家老松井家に蓄積された3万6,000点にも及ぶ史料群で、戦後、熊本大学に移管されました。永青文庫研究センターでは、2017年度以来、本史料群の本格的な目録作成調査と修復及び画像データ化を進めています。

今回紹介した史料は、目録作成調査を行う中で発見されたものですが、いずれも傷みがひどかったため、2025年度に修復を施したうえで、本格的な解読と研究に着手しました。解読が進んだことで、本史料が東南アジアに渡った八代商人の存在を示す史料であること、港町八代の歴史を解明するうえでの重要史料であることがわかり、発表に至りました。

(公開情報)

八代市立博物館未来の森ミュージアム再開館特別企画「再発見! 未来の森ミュージアム」にて特別公開する予定です。

八代市立博物館は、改修工事のため約2年間休館していましたが、本年4月24日(金)より再開館し、5月1日(金)から特別企画展を開催します。今回の史料発見には同館学芸員も関わっており、八代にとっての重要史料であることから、同館にて特別公開する運びとなりました。

期間 5月1日(金)～6月14日(日)

※展覧会については別紙開催要項を参照ください。

※1 徳湊の津 球磨川河口のデルタ地帯に位置する八代の港



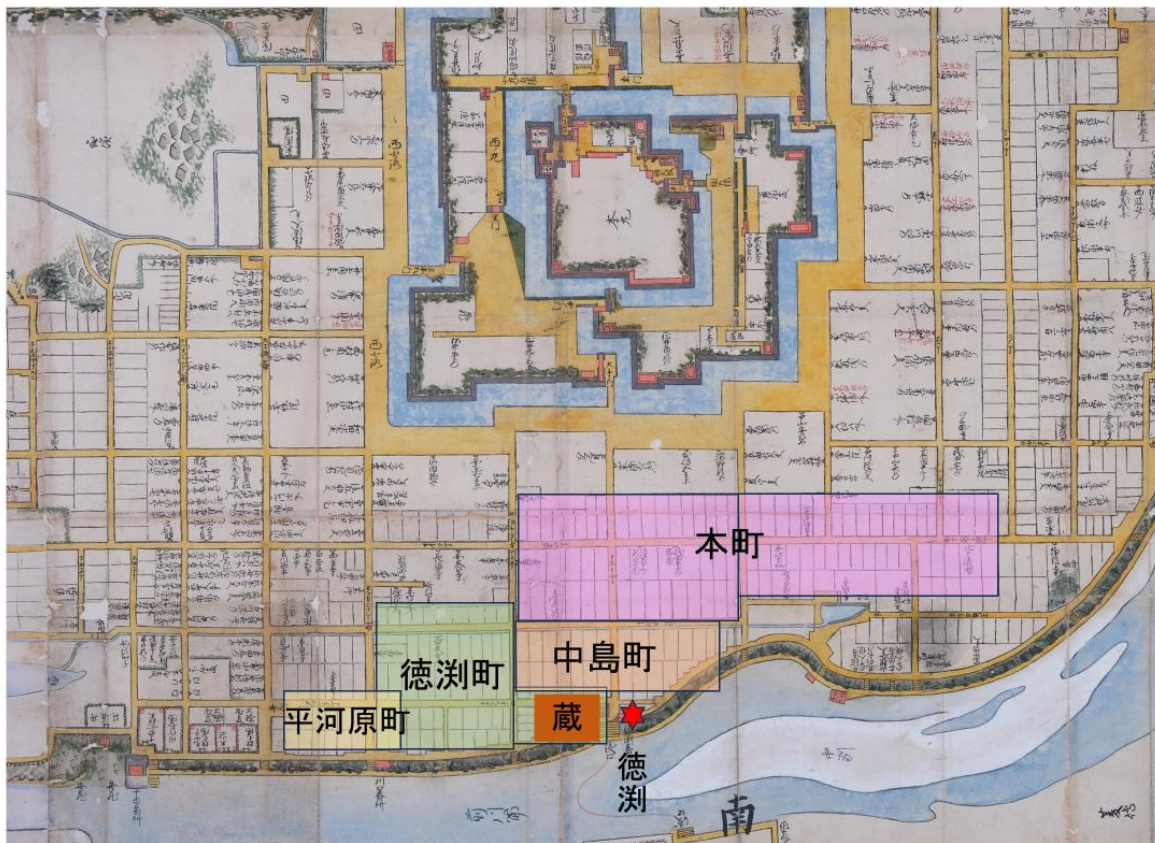
※2「八代日記」

相良家臣の場氏が編纂した年代記。文明16年(1484)から永禄9年(1566)までの出来事が記されています。相良家に伝来し、現在は慶應義塾図書館の所蔵となっています。国指定重要文化財です。

この「八代日記」の弘治2年(1556)3月4日の記述に「徳淵森と申候者渡唐船出候」とあることから、森という八代徳淵の商人が中国に貿易船を派遣したことがわかります。

※3 徳淵町 ※4 平河原町 ※5 本町

いずれも八代城下町を構成する町の一つです。



【お問い合わせ先】

(研究に関して)

熊本大学永青文庫研究センター

担当:センター長 稲葉継陽

電話:096-342-2304

e-mail:eiseiken@kumamoto-u.ac.jp

(画像資料の提供に関して)

熊本大学総務部総務課広報戦略室

電話:096-342-3271

e-mail:sos-koho@jimui.kumamoto-u.ac.jp

【連絡票】

八代が国際貿易都市だったことを示す
新史料 4 点を発見

- ・ 日時：令和8年4月13日（月）11時00分～12時00分（予定）
- ・ 場所：熊本大学本部棟 1 階大会議室（熊本市中央区黒髪2-39-1）

貴社名	
ご出席予定	<ul style="list-style-type: none">・ ご芳名：・ E-mail：・ 出席人数（ 名出席）・ 参加形式（対面・オンライン）

※恐れ入りますが準備の都合上、4月8日（水）17時までに、メール又はFAXにて送信くださいようお願いします。

※対面・オンラインのハイブリット形式で実施いたします。オンラインでの参加を希望される方には 4月10日（金）17時までに、連絡票記載のメールアドレスに、参加 URL を共有させていただきます。

熊本大学総務部総務課広報戦略室宛

メール送付先：sos-koho@jimui.kumamoto-u.ac.jp

FAX送付先：096-342-3110